

BLEACH～魂を導く先導者～

Shirasagi

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

小学生の少年、先導アイチは權トシキからブラスタースターブレードを貰って、いつかデツキを組んで彼とフアイトしたいと夢を見た矢先、交通事故に遭い幼い命を落としてしまう。が、彼の魂は“魂の故郷”とも呼ばれている尸魂界へと導かれる。

そして・・・虚との遭遇、死神・・・十番隊長日番谷冬獅郎らとの出会いによりアイチは死神として生きていくことを決意する。

目次

プロローグ

ハジマリ

デアイと目覚めたチカラ

—

15

—
1

プロローグ

ハジマリ

『きつたねえな。オマエ』

学校の帰り道、突然後ろから声を掛けられた僕は俯いていた顔を上げながら背後を振り返って見るとそこには亜麻色の髪の子が立っていた。

『……だれ?』

『俺は懼トシキ!なあ、オマエ名前は?』

男の子、懼くんはまるで太陽のような笑顔を浮かべて僕の名前を訊いてきた。僕にはその笑顔があまりにも眩しくて、俯きながら僕は名前を教えた。

『……先導アイチ、です』

『ふーん、アイチねえ……』と、眩きながら懼くんは僕の姿を眺める。そして、さつき僕に声を掛けたときと同じ言葉を投げ掛けた。

『なあ、アイチ。何でそんなにボロボロなんだ?誰かとケンカでもしたのか?』

『……ケンカなんて、してま……せん。これは、その……さつきそこで転んじやつて……』

それは嘘だ。僕は転んでなんかいないし、ケンカもしていない。

僕は俯きながら今の自分の姿を見下ろした。

全身アザだらけ、手足には所々擦り傷をつくり、顔は見えないけど多分アザがあるだろう。服もランドセルも全部泥だらけで權くんが『汚い』と言うのも無理はないだろう。

『転んだ』ねえ……。それにしちやあ、全身怪我だらけすぎねえ？ 転び過ぎだろ』
『……………』

『何だよ。無視すんなよ。……つたく、そんなんだから、アイチ。お前、いろんなヤツから嘗められんだよ』

『……………ごめん、なさい』

『そんなことで一々謝んなよ。調子狂うな……。どうせなら、言い返すくらいのも胸はないのか？』

『そんなの、無理です』

言い返すような度胸も勇氣も、僕にはない。そんなことしたら、生意気だって言われてボロボロになるまで虐められるに決まっている。

もつと、僕に言い返すぐらいの自信や強さがあれば……………。

そう考えていると、權くんは手に持っていたカードケースから一枚のカードを取り出して、僕の目の前に差し出した。

『ホラ、これやるよ』

『……これは？』

顔を上げて見てみると、裏面に英語で“Vanguard”と書かれ表面には白い鎧兜を身に付けた剣士のイラストが描かれていた。

ヴァンガード、名前だけは僕も知っている。今大人気のカードゲームで、いつかやってみたくなって思っていた。こんなカッコいいユニットのカード、何で僕なんかに頼くんはくれるんだろう？

『こいつはブラスタターブレード。すげー強い剣士だ。お前もコイツみたいになれ』
頼くんは言った。強くなれ、このユニット……ブラスタターブレードのように強くなれ。カードを受け取り、僕は改めてブラスタターブレードを見る。

白い剣を突き立てながら立つ白い剣士。強さと自信に満ちたその姿に、僕は何だか惹かれた。

ー僕も、このユニットみたいに……強くなれるのかな？

頼くんは、まじまじとカードを見つめる僕の姿を眺めながら拳を握りしめ、

『いいか？ イメージするんだ！ この強い剣士になった自分の姿を』

『イメージ……？』

『ああ。イメージはお前の力になる！ だから、強くなれ！』

目をキラキラと輝かせながら告げる櫛くんの言葉が、僕の中で広がっていくのを感じる。

『このカード、本当に僕なんかがもらっていいの?』

『ああ。おれ、最近ロイヤルパラディンからかげろうのクランに変えたから、もう使わねえし。だから、お前にやる』

結構レアカードなんだぞー、と言葉を付け加えながら櫛くんは急に突然、走り出した。

『あつ……あの』

『そのプラスチックブレード、大事にしろよな!』

その言葉を最後に櫛くんは走り去っていった。プラスチックブレードのカードだけ残して。

『ありがとうって、言っていない……』

いきなりのことだったので、お礼も言うのを忘れてしまった僕は、カードを握りしめながら茫然と櫛くんが走り去っていった方を眺める。

そして、再び視線をカードに戻して心の中で櫛くんが言っていた言葉を思い出す。

ーイメージはお前の力になる!

あの時の權くん、すごくキラキラしてて、まるでブラスタースターブレードみたいだったな。僕の中で、ブラスタースターブレードと權くんの姿が重なって見えた。あんな風に僕もなれるのかな？

僕はブラスタースターブレードになった僕自身の姿をイメージしてみた。イメージを通して、カードの中からブラスタースターブレードが「勇気を持って」って語りかけてくる。

家へ帰る道を歩きながら僕はカードをじつと見つめ、静かに微笑んだ。

『もし、僕がヴァンガードを始めたら……權くん、一緒にやってくれるかな……』
このブラスタースターブレードを使って、自分のデッキを作ったら權くんとはファイトする。僕の中で、小さな夢ができた瞬間だった。

遠くから、車の走る音が聞こえてきた。

今、僕は歩道がない少し狭い道路を歩いている。車を避けるため道の端っこに移動して、車が過ぎ去るのを待つことにした。

家までもう少し。別に帰りを急ぐ必要はないし、今日は宿題をやる以外やることがないので、宿題が終わったら貯めたお小遣いでヴァンガードのカードを買おうかな。

ーゴオオオオ

視界の端で大きなトラックがすごいスピードでこっちに近づいてくるのが見えた。小学生の僕でもわかるほど、明らかにこんな狭い道で出すようなスピードではないし、

時々、塀や電信柱に車体を擦らせて何だかおかしい。

トラックはどんどん近づいてきて、僕はブラスタブレードをギュツと握りしめながら近くの電信柱の影に隠れる。

怖いけど、ブラスタブレードが一緒なら大丈夫。

ブラスタブレードが、僕を守ってくれる。

そう思いながら、轟音に近いトラックのエンジン音に僕は顔を上げた。

『え……』

視界いっぱいに映るトラックが、僕の目に飛び込んできた。

それが、僕が最期に見た光景だった。

僕の体の何倍もの大きさのトラックが、僕が隠れていた電信柱に真っ直ぐと突っ込んできた。

痛みと衝撃を一身に受け、僕の意識は途切れた。



尸魂界 街外れにある森の中——

その日の晩は、見事な満月が出ていて辺りの木々を青白く照らしていた。

「おい、松本。本当にこっちで合ってるんだろうな」

「だあいじょうぶですよ、とうしろ……じゃなかった、たいちよく。確かに、この辺りから異様な霊圧を感じたんですから。冬獅郎だって、感じたでしょ？」

「冬獅郎じゃねえ、日番谷隊長だ。お前、何回俺を呼び捨てにすれば気がするんだ」

「だってえ、ついこないだまで三席だったんだし、今すぐ隊長って呼べたって、無理ですよ」

木々の間をすばやく移動する二つの影。少年のものとと思われる声と女性の声それぞれ言い合いをしながら森の奥へと進んでいた。

二つとも真っ黒な着物を着て、一見闇の中に溶け込んでいるように見えるが枝の隙

間から溢れる月の光で銀色の髪と橙色の長髪が彼らの存在を際立たせる。

それだけではない。少年と女性の背中と腰それぞれに鞘に収まってある一振りの刀と、少年の黒い着物の上から羽織った背中に漢字で「十」と書かれた白い袖無しの羽織り。女性の方は着物の懐から溢れんばかりの豊満すぎる胸は世の中にいる全ての男性を悩殺するのに十分すぎる。

橙色の長髪の女性は、護廷十三隊十番隊副隊長長松本乱菊。

銀髪の少年は護廷十三隊十番隊隊長日番谷冬獅郎。

二人はこの尸魂界を守る死神である。

冬獅郎と乱菊はこの地に虚が出現したとの連絡を受け、任務のため十番隊を引き連れてこの地に来ていた。本来、虚の討伐は隊長クラスが赴く任務ではない。普通なら平の隊員だけに任せるべきものだが、その数があまりにも多いのでこうして十番隊総出で任務にあたることになった。

虚の討伐はそんなに時間もかからず無事終えることができた。数は確かに多かったが、一体一体の力は弱かったので冬獅郎としては少し物足りない感じもしたが。

任務を終えたので、いざ静霊廷に戻ろうとした時、冬獅郎と乱菊は森のさらに奥から、微かだが霊圧を感じた。

それは虚のものではない、今まで感じたことのない霊力で冬獅郎は乱菊以外の他の隊

員は静靈廷に戻るよう命じ、自分たちはこの靈力の正体を探るべく森の奥へ向かつていた。

氣配を探りながら駆けていた冬獅郎と乱菊だったが、森の中に進んで行っても一向に靈力の持ち主が現れず、立ち止まって辺りを見回す。

「あれ〜？ おかしいわね〜、確かにこの辺りから靈力を感じたんだけどな〜」

やっぱ気のせいだったのかしら、と呟く副隊長を横に冬獅郎はこの地に残る靈力の残滓を探った。確かに、この場所に誰かがいた。それは確かだ。

だけど、いくら自分達を探しても人どころか獣一匹すらも見つかからない。

おかしい、この森、何かがおかしい。

「つたく、何がどうなってるんだ？」

この森に現れた虚は全て退治したはずなのに、何でこんなにも静かなんだ？

「チツ」と舌打ちしながら冬獅郎は、先に戻った隊員たちのこともあるので乱菊も戻るよう指示しようとした時、

ーグオオオオオオオオオオオオオオオオオ

「……………っ！」

森の奥から聞こえてきた声に、冬獅郎と乱菊はハッと顔を上げる。それと同時に伝令神機がけたたましく鳴り響き、虚が現れたことを二人に伝えた。

「隊長、この霊圧……」

「ああ、間違いいねえ。虚だ。しかも、こつからそう遠くねえ場所に現れたようだな」

「そんな、この森に現れた虚は全て倒したはずなのに……何故？」

乱菊が疑問を口にしてる間も、伝令神機は鳴り止む様子はみられない。座標を確認してみると、確かにここからそう遠くない場所を示していた。瞬歩で移動すれば、十分間に合う。

「今は兎や角言ってる暇はねえ。松本、行くぞ」

と言いつ残すと、冬獅郎は姿を消すように瞬歩で虚が現れた場所まで移動する。

「ちよ、待ってくださいよ！隊長!」

乱菊も慌てて瞬歩で冬獅郎の後を追った。



ーアイチ サイド

ーグオオオオオ・・・

「ハア、ハア、ハア・・・！」

背中から聞こえてくる化け物の声に止まりそうになる足を叱咤しながら、僕は全力で森の中を駆け抜ける。

足元は裸足、身につけた着物もそれぞれ草や木の枝で引つ掛けてしまいボロボロで傷だらけだった。

ーこわい、こわい、こわい、こわい・・・！

恐怖で目から涙が溢れでてきて、このままいつそのこと足を止めることができたらどれだけ楽か。

「あっー！」

木の根っこに躓いてしまい、僕はつんのめるように顔から転んでしまった。

ひざが痛い。どうやら、転んだ拍子に擦りむいてしまったみたいだ。

「うっ・・・うっ・・・ふえええ・・・」

地面に踞り、胸の奥に溜まっていたものを吐き出すように僕は声を上げ、泣き出した。こんなことをしてる暇なんてないのに、逃げないといけないのに。足が思うように動いてくれない。目から、涙がどんどん溢れ出てくる。

何で僕がこんな怖い目に合わなければいけないのか？

それは時を遡つて、冬獅郎たち十番隊が虚討伐をする少し前のことになる・・・

「ふえ・・・？」

肌を感じるヒンヤリとした空気の冷たさに僕は目が覚めた。目を開けてみると、飛び込んできたのは真つ暗な闇だった。

「()は・・・？」

目を凝らしてよく見ると、僕が今、森の中にいることに漸く気がついた。辺りが真つ暗なのは今の時間が夜であることを示していて、どうやら僕は夜の森の中で眠っていたみたいだ。

何で僕はこんな場所で眠っていたんだろう？

そう考えながらこうなつた経緯を思いだそうとする僕だった。けど、

「あれ？何で僕、ここにいるの？」

この森に来て、眠る前のごとくがどうしても思い出せないのだ。それだけではない。僕はどこで生まれて、何をしていたのか、名前以外の記憶が全て失われていた。

「うえ……こ、こわいよ……。まっくらで、何にも見えないよ……」

周りは暗い夜の森の中、助けを呼ぶにも人の姿は全く見当たらない。あまりの恐怖に僕は目に涙を浮かべて、側にあつた大木の根本に蹲った。

そして、このまま眠ってしまえて、ギユツと目を閉じてみるがさつきまで眠っていったためか、目が冴えてしまつて眠くなる様子がない。

空を見上げようと顔を上げるが、木の枝が邪魔で空も星も全く見えない。唯一わかることと言えば、枝の隙間から月の光が溢れているので月が出ていることが分かるくらいだった。

グウウウウ……

「お腹、すいた……」

お腹を抑えて、僕は必死に空腹を堪える。

グウウウウ……

しかし、堪えども堪えどもお腹の虫は鳴り止まない。それどころか、益々空腹はひどくなる一方。

「食べ物……探さない」と

とうとう、僕は我慢できず食べ物を見つけるため、勇気を振り絞つて立ち上がると森の中を歩き出した。

一体、どれくらい森の中をさ迷っていたのだろうか？

歩けども歩けども、森を抜け出すどころか、どんどん奥へと行ってる感じがする。

食べ物も木の実どころか、水さえ見つからない始末。

裸足ですつと歩いていたので足の裏がすごく痛い。

僕は近くにあつた岩に凭れながら地面に座り込んで、休むことにした。

両腕で膝を抱え込みながら膝の間に顔を埋めていると、歩き通しで疲れていたためか

眠気が僕を襲ってきた。

お腹すいてても、眠くなるんだな……。

ボンヤリと思いながら僕は迫ってくる微睡みに委ねて静かに寝息を立てて眠った。

少年の着物の懐から一枚のカードが、まるでアイチを守るかのように輝きを放っているけど当の本人は体力を消耗していたこともあり、それに気づくことなく眠り続ける。

アイチが眠るその森に大量の虚が出現し、十番隊の死神たちが討伐してるとも知らず……。

デアイ と 目覚めたチカラ

ーグオオオオオオオ・・・

真つ暗な闇の中から、ナニかの鳴き声が聞こえてくる。

岩の影に隠れるように蹲つて眠っていた僕は、その鳴き声に目が覚めて目元を擦りながら辺りを見回す。

まだ、日は昇つてなくて、辺りは真つ暗な夜の闇と静けさに包まれていた。

「今の、なに？」

先程、聞こえた鳴き声。その正体は何なのか探してみるが、目が少しずつ慣れてきたとはいえ、この生い茂つた森の中では見通しが悪くてよく見えない。

ーグオオオオオオ・・・

再び聞こえたその声は、僕が知っている動物でも、ましてや人の声でもない。

“化け物”ふと、僕はそんな言葉を思い浮かべ、こちらにどんどん近づいてくる足音を聞きながら岩影に隠れた。

あまりの恐怖に僕の目元には涙が浮かんでいた。

バキバキバキツーーーー

木々を薙ぎ倒し、真つ暗な闇から現れたのは、白い仮面のようなものをつけた大きな化け物だった。

「ひっ………!!」

「グオオオオオオoooooooooooo!!!」

思わず悲鳴を上げそうになって僕は慌てて両手で口を塞いだ。

恐怖で体全体が震え、今すぐこの場から離れたいけど足が思うように動かず、立つことができない。

化け物は僕が隠れている岩のすぐ向こう側で僕のことを探しているのだろうか、辺りをキョロキョロと見回している。

岩影から顔を覗かせて様子をはかっていたが、化け物が岩の方へ首ごと視線を向けた。

「……………」

慌てた僕は顔を引つ込ませて、小さな体をさらに縮こまらせ、心の中で『早くどっかに行つて』と念じながら必死に気配を消して隠れた。

けど、そんなことをしても化け物には通用しないことを僕は知らされた。

『マイヴァンガード！後ろ!!』

誰かに助けを求めようにも、こんな夜の森に来る人なんているのだろうか？

さつき聞こえた”声”も、あれ以来聞こえてこない。あれは僕の聞き間違いなのか？

逃げる僕の後ろを白い仮面の化け物とその巨体から想像できないほどの身軽さで木々の間をジャンプをしながら迫ってくる。

白いドクロのような仮面の、ポツカリと空いた目の部分の中からギロリと黄色い光のような目(?)が僕を見て、

ニタアーーーー

そう嗤ったような気がした。

それを見た僕は、ある確信を幼いながらも得た。

あの化け物は、僕をわざと追い詰めて・・・・・・遊んでいるんだ・・・・・・。

どんなに早く走っても・・・・・・あんなに身軽で素早いのだ。

ー逃げられない・・・・・・。僕は、あの化け物に・・・・・・やられちゃうの？

”死” ーその一文字が、僕の脳裏をよぎった。

「あつー！？」

それと同時に、僕は地面から突き出た根っこに躓いてしまい投げ出されるように転んでしまった。

「いつ……」

早く立ち上がって逃げなければいけないのに、立ち上がろうとした瞬間、右足首に激痛が迸った。

僕は右足首を抱えながら立ち上がれる地面に横たわったまま踞る。どうやら、転んだ拍子に足を挫いてしまったみたいだ。

痛みを我慢して、なんとか立ち上がろうとするが、足を地面につけた瞬間に再び激痛が走り、これではもう走って逃げることもできない。

ドスン、と木から化け物が飛び下りて地面に踞る僕の様子をまるで品定めするかのようじろじろと見つめている。

化け物の右手が僕の小さな体へと手を伸ばしてきて、そして、

僕は、あつという間に化け物の手に捕まってしまった。

「グオオオオオオオオー———!!!」

目の前で吠えられ、僕は耳の鼓膜が破れそうになる。耳を塞ぎたいけど、両腕は胴体ごと、ガシツと捕まれて抵抗することもできなかった。

僕を掴んだ右手が白いドクロの仮面の前まで持ち上げられ、薄目を開けると、化け物が口を大きく開けていた。

まるで、僕を食べようとするかのように。

いや、違う。

この化け物は、僕を食べるのだ。これから。

何で、こんなことをするのかそんなの化け物の考えることなんて僕には分からない。

「やだ………食べないで………」

体を振って化け物の手から逃れようと試みるも、強く握られていて、その手が緩む気配はみられない。

そんなことをしても、もう僕の“死”は決まったも同然だった。

「いやだ……死にたく……ない……」

こんなところで、僕は……死んじやうの？

化け物に、タベラレテ……？

瞬きをすることを忘れてしまった大きく見開いた瞳から涙が溢れ出てくる。化け物の顔が見えなくなり目の前が真っ暗になった。

『マイヴァンガードツ!!!』

あの時、化け物が近づいて来てることを知らせてくれた”あの声”が悲鳴を上げるように僕の頭の中で叫び声を上げる。と、同時に僕の着物の懐から蒼白い輝きが放たれ、その光は僕を護るように僕の全身を包み込んだ。

「……!!?」

今、僕に何が起こっているのか頭が状況を理解しようとフル回転させるも答えに至ることはなく、分かることはただ一つ……この光がすごく暖かくて、なんだか眠くなりそうなほど気持ち良いことだけだった。

僕の小さな頭を食べようとしていた化け物は、突然放たれた光により動きを止め、苦悶の声を上げる。

「グオオオオオオ!!??」

「わっ!」

苦しそうに暴れる化け物の右手の力が緩み、僕は地面に落下するように化け物に食べられるという事態から逃れることができた。けど、落ちるように逃れた僕だったけど、持ち上げられた高さはそれなりに高さがあつて、このままでは地面にたたき付けられて大怪我をしてしまうだろう。

しかし、僕は地面に落ちても先ほど怪我した右足首以外は怪我一つ負うことはなかった。

それは何故か———?

その答えは、僕を包んでいた光が人の……青年の姿となつて僕を落下の衝撃から護つてくれたからだ。

「だれ……?」

『もう、大丈夫ですよ。マイヴァンガード』

その青年は蒼白い光に包まれながら左腕で僕を大事そうに抱えて、もう片方の右手には白くて青い大きな剣が握られていた。顔は周りが真つ暗な夜であるためよく分からないけど、剣と同じ色の白と青を基調とし、さらに紅い宝石のようなものが埋め込まれた兜と鎧を身に纏っていた。

昔のことなんて全然憶えていないハズなのに、何故かこの鎧の人のことは知っているような気がする。

どこかで会ったことあるのかな？

「あの、ぼ、僕……」

「グオオオオオオオオオオ!!!」

この人が一体誰なのか尋ねようとする僕だったけど、青年の後ろで化け物が唸り声を発したことで僕の言葉は化け物によって掻き消されることとなった。

青年は化け物が再びこちらを襲うことを気配で感じると、表情はよく見えないが僕に優しく微笑むと、僕を左腕で抱えてその白い鎧で護り隠しながら、化け物と対峙した。

その瞬間、チャキツと右手から剣を構え直す際、金属音が聞こえた。

『大丈夫です。貴方のことは、私がこの身に換えてもお護りします。——だから、今はゆっくりとお休みください』

「あ……」

もう、大丈夫。その言葉を聞いた僕は心の中で「プツリ」と何か切れた音がした。意識が朦朧としてきて、睨が鉛のように重たく閉じようとしていた。

「この声、もしかしてさつき僕を助けようとしてくれた……?」

薄れていく意識の中、僕はこの声に聞き覚えがあることによく気がついた。

でも、気がついた時には僕の意識はほとんど闇の中へ堕ちかけていた。

青年の言葉を聞いて安心したことで今まで我慢していた疲労と、張り詰めていた緊張が途切れたことによるものだった。

『我が名はブラスタープレード。ユナイテッドサンクチュアリを守護する剣士であり、マイヴァンガード……貴方の分身でもあります』

ブラスタープレード……?」

雲が晴れ、月の光が周囲を淡く照らし出す。その光は、森だけでなくブラスタープレードと名乗った青年の姿も照らしていたけど、僕がその姿を確認しようとした時には、僕の意識は完全に途切れた。



「グオオオオオオオオオオ!!!」

夜の森の中を、虚の雄叫びが響き渡った。

「ちっ、ようやく追いついたか。あちこち、ちよこまかと動きやがって……!」

舌打ちをしながら瞬歩で、俺は虚を追跡していた。さつきまで副隊長である松本も一緒にいたが、虚との距離が縮まったのでこれ以上逃げられるのを防ぐため、挟み撃ちをするべく俺が今いる場所とは反対側に回っているのだ。

伝令神機からけたたましい音が鳴り響き、虚との距離がかなり近づいているのが分かる。

神経を研ぎ澄まし、虚の霊圧とすぐ側にいる、これは……魂魄の霊圧か？

虚は、どうやらこの魂魄の霊圧に引かれて現れたようで、あちこち動き回っていたのも、おそらくはこの魂魄が虚から逃れるため森の中を逃げ回っていたのかもしれない。

「……ッ、あそこか」

虚の霊圧を追っていくと、木々が無造作に薙ぎ倒された場所に出た。そして、数メートル先にそこらへんに立っている木ほどか、それ以上ありそうな巨大な虚が俺に背を向けて立っていた。

虚は俺に気づいていないのか、こちらに背を向けたまま、倒すには又とない絶好のチャンスだった。

霊圧を探ると、松本の霊圧も感じる事ができた。予定していた場所にちようど到着したようだが……

「……?なんだ?」

背中に背負った氷輪丸の柄を握った瞬間、虚の動きに変化が生じた。

虚の白い仮面に一筋の縦線が生まれ、そして、そこから仮面がズレて、

「グオオオオオオオオオオオオ……」

虚は最期の断末魔を上げながら、左右真つ二つに斬られて蒼白い光となって消えていった。

「隊長、今のは一体……?」

瞬歩で反対側から移動して来た松本が現れ、今日の前で起きた事態について尋ねてきた。

「松本、気を抜くな。まだ、終わった訳じゃねえみてえだぞ」

「え?」

俺は氷輪丸の柄を握ったまま、虚がいた場所を睨みつける。虚の巨体で隠れていて分からなかったが、虚がいた場所の目の前に一人の青年が白い剣を地に突き立てて、静かに立ち尽くしていた。青年の姿を目にした俺も、松本も警戒をさらに強くする。

月の光に照らされ、青年が身に纏っている白い鎧兜が煌めき、松本はあまりの美しさ

に思わず見とれてしまっている。そんな副官の様子を横目で見ていた俺は、呆れて息をつくと、鎧を纏った青年を睨み付けるように静かに訊ねる。

「てめえか、虚を倒したのは」

『ホロウ……それは、あの白い仮面の魔物のことか？』

青年は俺が言っていることを理解できていないのか、質問を質問で返してきた。姿は異様だが、どうやら言葉は通じるようだ。

「質問するのはこっちだ。貴様は一体何者だ？虚でもなければ、魂魄でもない。そもそも、てめえからは霊力も一切感じられない」

俺がコイツを警戒する理由、それは青年から霊力が全く感じられず、代わりに霊力とは違う”チカラ”を発している。

しかし……と、俺はここである疑問を抱く。

虚は人の魂魄を狙い襲う習性があり、その魂魄の秘めた霊力が高ければ高い程、狙われやすくなる。しかし、この青年は魂魄のようではないし、虚が狙うであろう霊力も持ち合わせていない。それに、さつき虚とは別の、霊圧も感じたハズなのに今はそれが全く……いや、微かにだが、青年の鎧で上手く隠されているが、左腕で小さな影を大切そうに抱えているのが分かる。

『私は、あなた方と敵対する意思はない。私の名は、ブラスタブレード。ユナイテッド

サンクチュアリを守護する者。この姿は、マイヴアンガードのイメージの力を通して意識をこの世界に飛ばして映した、一種の幻影のようなものだ」

ブラスタールブレード、ユナイテッドサンクチュアリ、どれも聞いたことのない名前だ。松本と目配せをするが、彼女もこの言葉に聞き覚えはないことを目線で知らせてくる。

敵対する意思はない、と彼は言っているが「はい、そうですか」と納得するほど、俺はお人よしではない。

「ブラスタールブレード、それが貴様の名前か。敵対するつもりはない、と貴様は言ったが、それならばそれ相応の意思をこちらに示して貰いたい」

『……了解した。ならば、“我が剣”と、マイヴアンガードの身柄をあなた方に托す』

そう言いながら、ブラスタールブレードは左腕で抱いていた一人の少年を俺らに見せた。その少年は、ボロボロの着物を身に纏っており、鮮やかな青色の髪を持ち、気を失っているのかグツタリと目を閉じている。年頃は、かなり幼いだろうと思われる。

「いっしょっぺー」

松本は少年の姿を目にし、キョトンと目を丸くしており、俺は奴の覚悟を改めて確認し、目を細めた。

「それが、テメエの示す“意思”か」

『マイヴアンガードのイメージが尽きるとともに、私の意識はもう直、元の世界へと戻ることになるが……マイヴアンガードが望むのなら、私は貴方の“剣”として、この身を捧げましょうー』

ブラスタブレードが言い終えるのと同時に、奴の全身が蒼白い光を放ちながら少しずつ薄れていく。

『マイヴアンガードを、アイチ様を頼む』

ブラスタブレードは慈しむような眼差しを少年に向けながら、托すように側にいた松本に俺よりもさらに小柄なその体を渡した。そして、ブラスタブレードは蒼い光となつてこの場から消え去り、残されたのは地に突き立てられたままの白い剣と、松本の腕の中でスヤスヤと気持ち良さそうに眠る蒼い髪の少年だった。

「隊長、この子……どうしましょう?」

「どうするも何も、このまま、森の中に放置するわけにはいかねえだろ。一先ず、コイツを連れて戻るぞ」

面倒なことになったー俺は、密かに舌打ちしながら少年のことは松本に任せ、白い剣へと歩み寄る。

遠目ではか確認できなかつたが、こうして間近で見ると俺の氷輪丸より、かなり大きいのが分かる。

この剣を、奴は片手で子どもを抱いたまま、虚を簡単に両断したのだ。

相当な剣の使い手だったのは、どうやら間違いないようで、あのまま戦っていたら、只では済まなかつただろう。

『我が剣を托す』とも言っていたし、とりあえず、この剣も持つていくことにしよう。あとで、十二番隊のところにコイツについて解析を頼むことにしよう（解析ついでに改造されるかもしれないが）

俺が白い剣の柄を掴んだ瞬間、突如、剣が光り出し、あまりの眩しさに俺は柄を握るその手を離しそうになった。

「なっ———」

「た、隊長!?!」

少年を抱えて、松本が俺の傍に歩み寄ってきた。その頃には、光もおさまっており、俺は静かに目を開いた。

何がどうなつてんだ? その理由を探るため、視線を剣に戻そうとするが……は、確かにあの白い剣の柄を掴んでいたのに、俺が手にしていたのは、死神が持つ、何の変哲もない、鞘に収まった斬魄刀だった。

「剣が……変わった?」

松本が驚きの声を上げる中、俺は鞘から斬魄刀を抜いて中身の確認をする。刃こぼれもくもり一つもない普通の斬魄刀のようだ。氷輪丸と比べると、刀身はやや短いがこれといって何の特徴もないただの斬魄刀にしか見えない。

現に、俺が試しに刀を振ってみても、先ほどの姿に変えることはなかった。

「隊長……大丈夫ですか？」

「ああ。何の問題もない。——瀨靈廷に戻り次第、俺は任務の報告と、そのガキのことを総隊長に報告する。この刀は十二番隊のところへ行つて解析に回しといてくれ。……間違つても、絶対、十二番隊長と副隊長にはコイツを渡すなよ」

松本に指示を出し、特に最後の言葉の部分だけ強く主張したのも、十二番隊長が護廷十三隊の中で、最も危ない奴でヤツに渡したら最期、解析する名目でバラバラにされるか、改造される可能性があるからだ。副隊長も、一見、奴よりまともに見えるが、彼女に渡したとしても最終的に隊長である奴のもとに渡っていくのは目に見えていた。

松本も俺が何を考へてるのか何となく分かつたようで、苦笑しながら頷き、そして、
「ずつと抱いたままの少年へと視線を向ける。

「はい、分かりました。……あの、隊長……。因みに、この子はどうしましよ
う？」

「とりあえず、四番隊に放り込んでおけば問題はないだろ」

白い剣だった斬魄刀を持ち、俺は瀨霊廷に戻るため歩き出す。

空を見上げると、月がいつの間にか傾いていて東の空が少しづつ明るくなっていった。

「行くぞ、松本。モタモタしてると、追いてくぞ」

「あつ、待つてくださいよぉ〜！たいちよー!!」

俺の姿が消え瞬歩で移動するのを見て、松本も慌てて瞬歩で後を追うように姿を消した。

二人が瀨霊廷に戻ったことで森の中には再び静けさが戻り、朝の日差しが木々を照らし出す。

これが、少年——先導アイチと死神 日番隊冬獅郎との出会い。

この出会いを切っ掛けに、アイチが死神になることを目指すのだが……それは、別の話——